日本環境教育学会第29回年次大会（東京）について —大会実行委員長の問題意識と公開シンポジウムの構想—

原子 栄一郎

東京学芸大学環境教育研究センター

On the 29th Annual Meeting of
the Japanese Society for Environmental Education (Tokyo):
Thoughts of the Executive Director of the Annual Meeting's Executive
Committee and Conceptions of the Public Symposium

Eiichiro 'Atom' HARAKO

Tokyo Gakugei University Field Studies Institute for Environmental Education

(受理日2019年1月6日)

The 29th Annual Meeting of the Japanese Society for Environmental Education was held from August 24-26, 2018 at Tokyo Gakugei University. The year 2018 was two years before commemorating the 30th anniversary of the founding of the Society.

The theme for the meeting was "Looking Back on the Roots of Environmental Education: Life, Environment and People." The concept of the theme was to deliberate from the beginning the path the Society has taken what it is and where it will lead to find seeds and germinate new environmental education. The original proposer of the theme was the Executive Director of the Annual Meeting's Executive Committee, the author of this paper.

The paper consists of two parts. First, it explains what the author considered in conceiving the theme based on the impact of the Annual Meeting in the history of the Society, the present state of environmental education in Japan both in practice and in research, and the reasons for choosing, and the intentions, implications and assumptions of the theme.

Second, the paper describes the conceptions of the Public Symposium, which took place on the second day of the Annual Meeting, based on the form, contents and organization of the symposium. Composed of a keynote speech and a panel discussion, it searched the roots of environmental education and the surrounding conditions. The record of the Symposium will follow the paper.

Key words: looking back, roots and conditions, life, environment and people, environmental education

I はじめに

2018年度の日本環境教育学会年次大会は、8月24日から26日まで、東京学芸大学で開催された。大会3日間を通して357名が参加し、130件の口頭発表（うち英語発表7件）、44件のポスター発表（うち英語発表2件、高校生発表7件）、7つの自主課題研究が行われた。研究発表のほかには、大会参加者向けイベントとして若手会員の集い、論文の書き方セミナー、会員懇談会、懇親会、常設・特設研究会、国際交流会、エクスカッションが実施された。また一般公開イベントとして、大会企画・公開シンポジウム、日本環境教育フォーラムとの共催企

画、教員セミナー、環境教育メッセが催された。

29回を数える今大会のテーマは、「環境教育の根本に立ち返る：いのち、環境、人間」であった。このテーマは大会実行委員長である原子が発案し、実行委員会で検討し承認された。

大会テーマの主旨は、環境教育に関わる一人一人が自分に立ち戻り、自己の環境教育の根本を尋ねてその大本について熟考し、また大本から思考したことをそれぞれが大会に持ち寄って議論を交わし、その交流から生まれるものに心を向け、心を留め、そして心を配ることにあった(原子 2018a,b)。大会企画・公開シンポジウムは、議論を触発・喚起し、思考と交流を促進する場として用

問い合わせ先 原子栄一郎 〒184-8501 東京都小金井市貫井北町4-1-1 東京学芸大学環境教育研究センター
atom@u-gakugei.ac.jp

意された。

本誌に公開シンポジウムの記録を掲載するに先立って、本稿では、筆者がどのような問題意識を持ってテーマを提案しシンポジウムを構想したかを論述する。

Ⅱ 大会実行委員長の問題意識について

1 第29回大会の位置付け

1990年に設立された日本環境教育学会は、2020年に創立30周年を迎える。学会10周年には、記念シンポジウム「環境教育の現代的展開とその展望」(1999年9月)を開催し、また記念誌『環境教育の座標軸を求めて』(2001年3月)を刊行した。20周年には、「過去に学び、今を知り、未来を語る：日本環境教育学会の20年から」(2009年3月)と題する座談会を行い、「環境教育学の構築を求めて：学会20年の到達点と展望」(2009年7月・12月、2010年3月)という特集を学会誌で組んだ。

筆者は20周年の折に、それまでの学会の研究成果を総括する企画に参加し、そのまとめとして「環境教育というアイデアに基づいて環境教育の学問の場を開く」(2010)と題する総説を書いた。続いて、2010年5月に開催された第21回大会では、「日本環境教育学会第3の10年紀」と題する個人発表を行い、結語として次のように述べた。

2020年、私たちはどのような学会30周年を迎えるだろうか。どのような研究成果をまとめるだろうか。学会第3の10年紀は、「道具的メンタリティ」の方へ行くだろうか。「反省的メンタリティ」の方へ行くだろうか。それとも、どちらとも違った方へ行くだろうか。

三つのことを述べて、発表を締めくくりにする。一つ目は、自己吟味をする。二つ目は、研究する。三つ目は、本当にまじめに議論し、討論を尽くす。学会の生命は、熟議にあると思う。異なる意見を持った人たちが、絶えず自由闊達に議論し、時に論争もし、新しい生命を生み出し続けていること、そこに、そのことに学会の存在理由と価値があるのではないか⁽¹⁾。

2014年からは、安藤聡彦氏と共に「環境教育学を拓く」という自主課題研究を、毎年、学会大会で開いている。

20周年以降、筆者は学会の中に学問の場を開いて、環境教育学という学問を拓く議論を少しずつ積み重ねてきた。この試みを発展させて、30周年という節目をどのような機会とすればよいだろうか。30周年の機会に、それ自身のための企画を立てて実施するという発想もあるだろう。あるいは、そこに至る道程でなされる学会にふさわしい勝義の「研究」の議論の蓄積の中から生まれるアイデアに、形と内容を与えて企画を形作るといふ発想もある。ポール・ゴーギャンの絵画のタイトル「我々はどこから来たのか 我々は何者か 我々はどこ

へ行くのか」のひそみに倣って、筆者は後者の発想から、30周年を前にして来し方行く末を熟慮する時として今大会を位置付けた⁽²⁾。

2 環境教育の今

来し方を見つめ行く末を見据えるために、環境教育の今を実践と研究の両面から見取りたいと思う。

1) 環境教育実践

日本環境教育フォーラム(2016)が作成した日本の「環境教育図録」を見ると、日本の環境教育は自然保護教育と公害教育を主要な源流とし、変動する社会と環境の中でダイナミックに展開し、今日では多種多様な環境教育が行われていることが分かる。

国際的な環境教育運動は国際環境教育計画(1975年から1995年)によって推進され、1980年代以降の持続可能な開発・発展をめぐる議論を受けて国連持続可能な開発のための教育の10年(2005年から2014年)に発展し、環境教育の世界標準は持続可能な開発のための教育(ESD)と認識されるようになった。さらには2016年から2030年までの国際開発目標である持続可能な開発目標(SDGs)と連動して、環境教育は、現在では「持続可能な開発目標のための教育(Education for SDGs、ESDGs)」(UNESCO 2017)の段階にある。

このような国際的動向と深く関わり合いながら、日本の環境教育実践は百花斉放の状態にある。百花の芯をなし基調となっているのは「持続可能性(sustainability)」(持続可能な社会、SD、SDGs)の概念である。

2) 環境教育研究

日本の環境教育の今の風景の中で、日本環境教育学会の取組みとして目に留まるのは、2017年に英文電子ジャーナルが刊行されたことである。これは、日本環境教育研究史における画期的な出来事だと思う。ジャーナルは学会誌『環境教育』の臨時増刊号として編まれ、「アジアの環境教育」を特集した。この取組みは、アジア各国および地域内の環境教育研究ならびに実践報告を共有することを目的とし、英語を共通語とする交流のコミュニケーションチャンネルの一つとなることを願ったものである⁽³⁾。学会は、国際交流委員会を窓口として2009年以降、韓国環境教育学会、中華民国環境教育学会(台湾)、北米環境教育学会、オーストラリア環境教育学会の各国学会と交流協定を締結し、活発な国際交流を行ってきた。その蓄積の上に、降旗信一・二宮リムさち両氏を共同編集長とする2年間の共同比較研究として、この画期的な成果は実った。

特集号は、①フォーマル環境教育、②ノンフォーマル環境教育、③環境教育研究、④アジア圏外からの洞察、⑤総括の5部からなる。総説論文を執筆した二宮リムら⁽⁴⁾は、寄せられた論文を整理して各分野の研究課題を抽出し、次のように要約している。

- ① 学校における環境教育の制度化、学校教育の質的改善に果たす環境教育の役割、大学入試と同調する学校における環境教育の周縁化
 - ② ノンフォーマル環境教育の限定的な社会的波及効果、多様性と自律性を特色とするノンフォーマル環境教育に与える政策的制度化の影響
 - ③ 環境教育実践から環境教育研究への転換を媒介する環境教育学の構築
 - ④ 生物地理学的・社会文化的・社会生態学的歴史と関連付けられた環境教育理解、異文化間環境教育交流の協働、「ポストヒューマニズム」環境教育の展開、オーストラリアにおけるアジア系移民のための環境教育
 - ⑤ 環境教育の将来展望、価値・論争・ジレンマの省察、「ポスト真実」の批判的直視、必要な措置の実施
- 次に取り組むべきこととして指摘されているのは、より多くの人たちの参加によって、生態学的・地理学的・社会的・政治的・経済的・文化的文脈との関連でアジアの環境教育専門家としての実践を批判的に反省し、さらなる発展とグローバルな環境教育協働に貢献する方法を見出すことである。

今後の比較研究のトピックとしては、学校の環境教育カリキュラムと教科書、大学教育における環境教育、国立公園における環境教育、森林環境教育、コウノトリ保全の環境教育、減災教育、環境教育法などがあげられている。

これらの指摘を踏まえるならば、日本環境教育学会のリーダーシップによって行われた共同比較研究の主たる研究関心は、環境教育の体系、法制度、政策と事業、実践にあると言える。

3 大会テーマの設定理由と意図ならびに含意

今大会を来し方行く末を熟慮する機会とする上で、環境教育の実践と研究の今を、持続可能性を主調とする環境教育実践の百花斉放の現状と、国際共同研究を視野に収めた東アジア圏における共同研究の推進に見て取った。これらを念頭に置いてさらに筆者が考えたのは、次のことである。

- ・ ESDGsの段階にある環境教育の起点・基点は、1992年に開催された国連環境開発会議にある。指針となるのは、会議で採択された『アジェンダ21』第36章「教育、意識啓発、訓練の推進」の基調「教育の向きをSDの方へ変えること（Reorienting education towards SD）」である。その中心課題は、教育を再考し（rethink）、再定位する（reorient）ことにある。その意味するところは、教育がこれまで定位していたものを同定し、その根底的再考から再定位の先を見極めつつ、教育の再編を構想することである（原子2014）。

- ・ 環境教育実践における百花斉放の結実をもたらした大本にあるものに目を向ける。
- ・ 環境教育のさまざまな事象に向けられた共同研究の関心を、諸事象の大本にあるものに向ける⁽⁵⁾。
- ・ 大本に目を向け、そこから来し方を見つめ、行く末を見据える。

このように考えて、大会の主題を「環境教育の根本に立ち返る」と設定した。この主題に込められた意図と含意について、もう少し詳しく述べることにしよう。

環境教育を成り立たせるそもそもの大本にあるもの、すなわち環境教育の根本を考えるに際して、幾つか踏まえるべきことがあると筆者は考える。

- ・ 人間が存在することに先立って、存在を可能にする環境があるということ。
- ・ その環境の中で人間はヒトとして生まれ、環境との複雑な相互作用関係を通して生成し形成されて人間となり、また変容してかけがえのない生涯を歩み、終えるということ。
- ・ 人間の諸活動は環境に修復不可能な巨大な破壊を与え、破局をもたらすということ。

このようなことを踏まえて、環境教育の根本を考える端緒として、筆者は「いのち」、「環境」、「人間」という3つのキーワードを副題に提示した。それぞれの言葉の含意を示すために、大会テーマに関するconcept paper⁽⁶⁾には、キーワードを次のように敷衍して述べた。

- ・ いのち：一つの生き物が生き物として活動する根源の力としての「生命」、一つの生き物の生死を超えて連なる38億年に及ぶ生き物の歴史の物語「生命誌」、人間という生き物が「死」の問題に触れて実感することができる「いのち」、筆者たち人間が日々営む「生活」。
- ・ 環境：生き物を取り囲み、相互に関係し合って影響を与える世界、いのちの場所。「生命」の世界／場所は「自然」であり、「いのち」の世界／場所は「いのちの世界」であり、人間の「生活」の世界／場所は「歴史的社会」である。
- ・ 人間：人間は、生き物として、社会的存在として、また「いのち」の存在として、「自然」、「歴史的社会」、「いのちの世界」を含む環境と様々に関わり合いながら、ダイナミックに生きる。そのダイナミズムには、いのちと環境の互いに支え合う関係を逸脱して、不適正あるいは過剰な開発を行い、いのちと環境と人間を破壊する歴史も含まれる。この負の向きを転換するために、SDGsは5つの柱を指定している。

- ① 人間（People）：あらゆる形態と次元の貧困と飢餓に終止符を打つとともに、すべての人間が尊厳を持ち、平等に、かつ健全な環境の下でその潜在能力を発揮できるようにする。
- ② 豊かさ（Prosperity）：すべての人間が豊かで充実した生活を送れるようにするとともに、自然と調和し

た経済、社会および技術の進展を確保する。

- ③ 地球 (Planet) : 持続可能な消費と生産、天然資源の持続可能な管理、気候変動への緊急な対応などを通じ、地球を劣化から守ることにより、現在と将来の世代のニーズを充足できるようにする。
- ④ 平和 (Peace) : 恐怖と暴力のない平和で公正かつ包摂的な社会を育てる。平和なくして持続可能な開発は達成できず、持続可能な開発なくして平和は実現しないため。
- ⑤ パートナリシップ (Partnership) : グローバルな連帯の精神に基づき、最貧層と最弱者層のニーズを特に重視しながら、すべての国、すべてのステークホルダー、すべての人々の参加により、持続可能な開発に向けたグローバル・パートナーシップをさらに活性化し、このアジェンダの実施に必要な手段を動員する。

これが大会主題の意図と含意である。では主題にある「立ち返る」所とはどこだろうか。二つある。一つは、今述べた「いのち」、「環境」、「人間」の在り所である環境教育の根本である。大会テーマに明示されている通りである。もう一つは、環境教育に携わる一人一人のその人自身、自分である。自分を棚上げにして他人事で済ますのではなく、自分に立ち戻って自分自身をよく見つめ、自己の環境教育の足元を照らし顧みることによって我が事として環境教育の根本を考えるのである⁽⁷⁾。この二つが、「環境教育の根本に立ち返る」の意味するところである。

4 大会テーマの前提にあるもの

1960年代の初めに、レイチェル・カーソンは『沈黙の春』(原著1962年／翻訳1974年)を著して、DDTを始めとする農薬などの化学物質が生態系に及ぼす危険性を明らかにし、人間が生み出す環境問題に警鐘を鳴らした。彼女は、環境問題の古典と言いつつこの書物の執筆中にがんの宣告を受けたのだが、4年の歳月を農薬問題の徹底的解明に費やして、この書物を世に問うた。

子供たちの世界は、いつも生き生きとして新鮮で美しく、驚きと感激にみちあふれています。残念なことに、わたしたちの多くは大人になるまえに澄みきった洞察力や、美しいもの、畏敬すべきものへの直感をにぶらせ、あるときはまったく失ってしまいます。

もしもわたしが、すべての子どもの成長を見守る善良な妖精に話しかける力をもっているとしたら、世界中の子どもに、生涯消えることのない「センス・オブ・ワンダー＝神秘さや不思議さに目を見はる感性」を授けてほしいとたのむでしょう。

この感性は、やがて大人になるとやってくる倦怠と幻滅、わたしたちが自然という力の源泉から遠ざかること、つま

らない人工的なものに夢中になることなどに対する、変わらぬ解毒剤になるのです。(カーソン 1996 23ページ)

「神秘さや不思議さに目を見はる感性」すなわち「センス・オブ・ワンダー」をタイトルとする書物が出版されるのは、カーソンの死後、1965年のことである。メインの森や海辺を一緒に歩いたロジャー(姪の子ども)に捧げられたこの書は、元々は雑誌に掲載され(1956年)、没後、友人達の手によって本として出版された⁽⁸⁾。

がんに蝕まれた体で人間がもたらす環境破壊に警鐘を鳴らす『沈黙の春』を書き、滋味あふれる言葉で「子供たちに不思議さへの眼を開かせよう」⁽⁹⁾と『センス・オブ・ワンダー』を綴るカーソンは、まさに情理を尽くす「センス・オブ・ワンダー」の人だと言える。

『センス・オブ・ワンダー』の元になるエッセイが発表された同じ年の5月、日本では、新日本窒素肥料株式会社水俣工場附属病院院長細川一が水俣保健所に原因不明の脳症状患者4名が発生したと報告し、水俣病が公式確認された。その年の7月に発表された『年次経済報告』(通称、『経済白書』)は、「日本経済の成長と近代化」を副題とし、結語で「もはや『戦後』ではない」と言明し、次のように述べた。

われわれはいまや異なった事態に当面しようとしている。回復を通じての成長は終わった。今後の成長は近代化によって支えられる。そして近代化の進歩も速やかにしてかつ安定的な経済の成長によって初めて可能となるのである⁽¹⁰⁾。

戦後日本経済の復興宣言をした日本は、高度経済成長期に突入したのである。

そして、カーソンの胸部にがんが見つかった頃(1960年)、不知火海の漁師である緒方正人(2000)は父親を急性劇症型水俣病で失い、自身も発病する。父親の発病と狂い死にしてゆく姿を目の当たりにしたことを根本動機として、彼はチッソをダイナマイトで爆破してやりたいと思うほどの恨みに駆り立てられた少年期を過ごし、20歳の時に水俣病患者運動に参加する。その後、10年ほど運動の最前線で加害者責任追及の闘いに奔走するが、1985年、突如、水俣病認定申請を取り下げた。そして、水俣病と自分自身について狂って狂って考え、被害者である自分も、巨大な「システム社会」(194ページ)すなわち「時代の価値観が構造的に組み込まれている・・・世の中」(195ページ)の一員であり、「『豊かさ』に駆り立てられた時代」(195ページ)の価値観に支配されて「チッソ的な社会」(196ページ)に甘んじて暮らしてきたという点においては、「もう一人のチッソ」(196ページ)であると告白する。そして翌1986年、単独でチッソ工場前座り込みを行い、以来、ほかの患者の人達にも自分なりの呼びかけ方をしてきている。緒方が

求めるのは、制度化された社会の中での和解や救済ではなく、「魂の救い」（198ページ）である。

その緒方（2001）は言う。

私たちは今、「数十億年に渡る遙かなる生命の記憶とそのルーツさえ見失い、命の迷い子となって生命感覚を喪失している」のである。（10ページ）

「命の迷い子」となった人間は、人間を人間と思わなくなってしまった。「水俣病事件は、人が人を人と思わなくなったそのときからはじまったパイ。」（緒方・辻 1997 135ページ）。「水俣病事件」を典型とする命からの離反、そして命への反逆の惨劇は、今日もなお繰り返され続けている。

レイチェル・カーソンや緒方正人と共に、私たちは「生命感覚を喪失」し、「センス・オブ・ワンダー」を萎えさせ、「命の源」が分からなくなつて「命の迷い子」になっている、と筆者は考える。これが、大会テーマの前提にある認識である。

Ⅱでは、「環境教育の根本に立ち返る：いのち、環境、人間」という大会テーマの発案者である原子の問題意識を開陳し説明した。次に、このテーマの下にどのようにシンポジウムを構想したかについて述べることにする。

Ⅲ 公開シンポジウムの構想について

まず、シンポジウムの形式は、講演とパネルディスカッションの2部構成とすることにした。次に、大会テーマとシンポジウムのテーマを統一し、その主旨を「持続不可能な社会を持続させる私たちの個人的・社会的心性と、高度に人工化・システム化された社会と、そこで営まれる私たちの日常生活を覆う堅牢なベール。その下にある本当に大切なもの・こと、すなわち環境教育の根本を尋ねます。」⁽¹¹⁾と提示した。そして、講演者には、年次大会会場校である学芸大学がある地域に根を下ろして、趣旨に合致する仕事をしている方を招聘したいと考えて、小金井市在住の映画監督の瀬瀬あや氏にお願いした。パネリストについては、瀬瀬氏との事前打ち合わせで、一人は瀬瀬氏自身に非常に大きな影響を与えた自由学園の関係者にお願いすることになり、学園長の高橋和也氏に決定した。もう一人は、環境教育の根本を尋ね、その消息を探り知る上で、生物的・社会的存在であると同時に「いのち」の存在として「いのちの世界」にも生きる人間の次元に光を当てるために、富坂キリスト教センターの総主事であり牧師でもある岡田仁氏にお願いすることにした。

講演のタイトルは、瀬瀬氏と相談し、「日々の生活から環境教育の根本を尋ねる」とした。

6月22日に東京学芸大学に登壇者3名が集まり、事前打合せを行った⁽¹²⁾。講演者の瀬瀬氏にその時点で考

えている講演のアウトラインを話してもらった後、2名の登壇者がそれぞれ応答し、またほかの出席者も交えて自由に意見交換を行った。整理すると、瀬瀬・高橋・岡田三氏の話の概略とそこから筆者が汲み取った要点は次のようになる。

* 瀬瀬あや氏

【概略】ドキュメンタリー映画制作をめぐって

・映像を撮る際に、場所と人とのさまざまな関係の全体を捉えること

これまでに制作した2本の映画は、原発問題あるいは被差別部落問題というテーマと密接な関わりを持つ作品であるが、「問題」に照準を合わせて映像を切り取って撮るのではなく、「問題」が生起する人々の暮らしの場に編み込まれている関係の全体性を描くことによって、その文脈と共に「問題」をあぶり出す。

・映像を撮ること

明確な形にならないものを映像に捉える。たとえば、祝島でなぜ36年間もの間、反原発運動をしているかを質問すれば、何らかの言葉で返答を得ることができる。しかし、その言葉を映画で映して発信したとしても、それが先の質問に対する本当の答えかどうかは分からない。そうではない映像によって、本当の答えを捉えることができるかもしれないということを考えて映像を撮り、編集して映画作品を作る。

・映画を作ること

10人程度の仲間と手作りで、映画作品の企画から上映まで含めて、映画を作る環境を作る。

・自己の出自としての自由学園

なぜこのような映像を撮り、映画を作るかを考えた時、自由学園で学んだことが決定的要因となっている。学園生活を通して、自分は学園のために何ができるかを一人一人が考えるようになり、自分は学園にとって欠くことができない大切な存在であるという意識が培われる。

【要点】

・瀬瀬氏の映画には、人々の日々の暮らしの場を撮って生身の「人間」が描かれている。

・瀬瀬氏の映画に映る祝島や北出精肉店の人たちが日々繰り返す営みは、世界の各地で長い年月にわたって行われてきた「人間の営み」である。

・「人間の営み」は悠久の「自然の営み」と切り離すことができない。

* 高橋和也氏

【概略】自由学園の教育について

・自由

学園の名前にある「自由」は、自分のわがままや勝手を優先させるのではなく、共同社会のためによい方を選ぶことのできる自由である。

・人としての土台を作る教育

日々の生活の中から学ぶことを大切にしている自由

学園の教育の伝統を、現代の環境教育やESDの観点から捉え直し位置づけ直す。

・神から与えられたいのちへの責任

一人一人に与えられている大切ないのちを、自分のためによく生きると共に、学園の中で共に生活する人たちのためによく生きる。

・当事者意識

上記の経験を通して、自分を棚上げにせず自己を活かしてよく生きることによって、よりよい社会をつくることができるという意識を育む。

【要点】

- ・自由学園の教育は「人間になる」教育であり、また「人間であること」を自覚的に生きる教育である。
- ・自由学園の教育は、「生活即教育」、「自労自治」という考えによってデザインされている。
- ・日々の学校生活を通して、子どもたちが自然な形で自己（個人）と他者（社会）との相互依存・作用関係を経験している。
- ・子どもの持つ「自然性／生命性／本有性」と「社会性／有能性／有用性」という対照的な性質が、学校生活の中でダイナミックに育まれている。

* 岡田仁氏

【概略】 自身の水俣体験をめぐって

・救いとしての苦しみ

水俣病という苦難は天からの授かりものであるという水俣病患者の経験の語りは、人間が経験する苦しみの先にある救いと希望の予表、すなわち未来に来るものの象徴である。

・知って変わる

知ると言うことは頭で理解するだけではなく、何かを知って学んで分かって、その人の生き方が変わるという知り方がある。

・霊性／スピリチュアリティ

アイデンティティ、人間の尊厳、その人がその人らしくあるということと深く関係して、人間は霊性／スピリチュアリティという重要な心的要素を有している⁽¹³⁾。

【要点】

- ・水俣病患者の苦難の受容は、「人間であること」の真髄であり、人間の尊厳を示すものである。
- ・それは、近代の昂進する進歩主義や功利主義に強く影響されている人間観に対して、未解明・未開拓の人間の次元・側面を指し示しており、そのことを表現する共通の言葉を私たちはまだ有していない。
- ・苦難を恵みとして受容する水俣病受難者のアイデンティティは、「私は、もはや古い私ではなくて、新しい私である」と言い得る自己変容のそれである。

額額・高橋・岡田三氏の話題提供をこのように整理して、環境教育の根本を尋ね、その消息を探り知るといふ公開シンポジウムの趣旨に対する登壇者の話の核を、

筆者は、いのちと環境を巡る人間とその消息、換言すれば人とは何者なのかという問いであると受け止めた。このように約言する前提には、現代の人間に関する筆者の次のような認識がある。

- ・今日、教育界ならびに環境教育界において、人間を「人材」として捉える人間観が遍在し、「人間不在」の時代にある。
- ・それはまた、人間なるものが分からなくなっている「人間不明」の時代でもある。
- ・そればかりか、私たち一人一人が、人間の個別具体である「この私」が分からない「自己不明」に陥ってしまっている。
- ・そのことを棚上げにして、社会から要請される喫緊の諸課題に即応する「人材」の促成育成が唱導され、推進されている。
- ・人間が断片化されて社会的な役割で語られ、「私は人間である。」という人間を丸ごと捉える感覚や認識を欠いている。
- ・さらに、緒方（2000）が言うように、私たちは「命の源」（201ページ）を忘れてしまって「命の迷い子」になってしまっている。
- ・その結果、人間は「命／いのち」に背くことを繰り返して行ってきた。

公開シンポジウムの主旨に書いた「持続不可能な社会を持続させる私たちの個人的・社会的心性と、高度に人工化・システム化された社会と、そこで営まれる私たちの日常生活を覆う堅牢なベール」は、今述べた現代の人間の消息に由来するものと考ええる。

再整理すると、いのちと環境を巡る人間とその消息、換言すれば人とは何者かという問いとして筆者が聞き取ったことの骨子は次の通りである。

- ① 人間：額額氏の映画に描かれる、日々の暮らしの場の関係の全体性を生きる生身の人たち。
- ② 人間の営み：自然の営みに添って、前の世代を受け継いで淡々と働いて日々の暮らしを営み、次の世代へ手渡してゆく。人間はほかの生命を育て、また殺して食べて生きる。自由学園では、人間の営みが「教育」として実践されている。水俣病は、命のつながりが人間活動によって切断された事件であり、食物連鎖によって濃縮されて発生した。
- ③ 人間になる／人間である：そのような人間の営みを通して、ヒトは人間になる。また、人間になりつつ、人間であることを生きる。人間には未知・未解明・未開拓の次元・側面があり、時が熟して人間であることになる。
- ④ 人間の教育：教育には、教えることができるもの・ことと、教えることができず、生きて感得・会得・体得するもの・ことがある。教育のための教育ではなく、生活即教育について熟考する。

以上を登壇者および事前打合せ出席者の間で共有し、公開シンポジウムに臨むことになった。

IV おわりに

本稿に続いて、公開シンポジウムの記録が掲載されている。記録は、ボイスレコーダーの録音を文字起こしして粗原稿を作成し、修正して元原稿とし、登壇者の校閲を経て、原子が最終原稿を完成した。粗原稿と元原稿の作成にご協力頂いた石崎一平さん、野呂美紗貴さん、梁取優太さん（以上、東京学芸大学大学院教育学研究科）ならびに原子裕子氏、そしてご多忙の中、校閲の労をお取りくださった登壇者三氏に、心から感謝の意を申し伝えたい。

なお、登壇者のプロフィールは以下に記す通りである。

* 額額あや（はなぶさあや）、映画監督

1974年東京生まれ。自由学園卒業。2010年に上関原子力発電所に反対し続ける島民の暮らしを映し撮った映画『祝の島（ほうりのしま）』を初監督。シチリア環境映像祭で最優秀賞受賞。大阪貝塚市の北出精肉店の家族の暮らしを描いた二作目『ある精肉店のはなし』（2013年）は平成26年度文化庁映画賞文化記録映画部門大賞。現在は、日本の移り行く時代の中で見えかかっている人々の営みを映像に記録し続けている。

* 高橋和也（たかはしかずや）、自由学園学園長

1961年埼玉県生まれ。自由学園男子最高学部、早稲田大学大学院教育学研究科卒業。世界新教育学会、日本ホリスティック教育／ケア学会、日本シチズンシップ教育フォーラム所属。2016年4月より現職。

* 岡田仁（おかだひとし）、（公財）基督教イースト・エイジャ・ミッション富坂キリスト教センター総主事。1967年大阪生まれ。関西学院大学神学部卒業。同大学院在学中、水俣で現地研修。佐世保比良町教会牧師などを経て、ドイツ・ホフガイスマール牧師研修所に留学（2006年～）。2009年より現職。

注

- (1) 日本環境教育学会第21回大会（沖縄）個人発表原稿（2018年5月23日）より。ページ番号なし。
- (2) 20周年にも過去・現在・未来の視点から学会の歩みについて考えたが、今回は、環境教育の「根本」という考える視座を明示した。
- (3) 日本環境教育学会国際交流委員会、<http://www.jsfee.jp/about/28-international/354-special-issue-ee-in-asia>（2018年3月9日アクセス）、学会誌『環境教育』特集号「アジアの環境教育」編集委員募集のお知らせ。
- (4) Ninomiya-Lim, S., Sakurai, R. et al. 2017, Sharing, Comparing, and Developing Environmental

Education in Asia: For the Journey to be Continued, *Japanese Journal of Environmental Education*, 26(1): 77-83.

https://www.jstage.jst.go.jp/article/jsfee/26/4/26_4_77/_pdf/-char/en（2018年8月18日アクセス）

- (5) 環境教育研究の関心を大本にあるものに向けることに関連して、筆者は、2016年に学習院大学で開催された第27回年次大会（東京）における特集号「アジアの環境教育」ミーティングで、環境教育研究を①環境教育研究（environmental education research）から②環境教育研究についての研究（research about ①）さらには③環境教育研究についての研究についての研究（research about ②）へと掘り下げて進めることを提言した。2016年8月7日付け議事録を参照のこと。また、第29回年次大会3日目に開催された国際交流会での大会実行委員長挨拶で、環境教育の根本に立ち返り、来し方行く末を熟慮することを「deep environmental education」（2018年8月26日挨拶英文メモ）と表現した。
- (6) 一般社団法人日本環境教育学会、<http://www.jsfee.jp/images/meetings/2018tokyo/Concept-Paper-2018.pdf>（2018年12月20日アクセス）。
- (7) 「立ち返る」の二つ目の意味を、学会ニュースレター第120号（2018）の巻頭言では「環境教育を脚下照顧する」と表現した。
- (8) レイチェル・カーソン日本協会、<http://j-rcc.org/history.html>（2019年1月2日アクセス）。
- (9) 「子供たちに不思議さへの眼を開かせよう」は、雑誌に掲載されたエッセイのタイトルである。前掲注（8）。
- (10) 内閣府、<https://www5.cao.go.jp/keizai3/keizaiwp/wp-je56/wp-je56-010501.html>（2018年12月27日アクセス）。
- (11) 一般社団法人日本環境教育学会、http://www.jsfee.jp/images/meetings/2018tokyo/jsfee2018_flyer2.pdf（2019年1月2日アクセス）。
- (12) 登壇者3名以外の出席者は、原子栄一郎（大会実行委員長）、小柳知代氏（大会実行委員会事務局長）、諏訪哲郎氏（日本環境教育学会会長）、樋口利彦氏（大会実行委員）と、公開シンポジウム協力者の東京学芸大学大学院生3名であった。
- (13) 岡田氏は、霊性／スピリチュアリティの概念を説明する際、WHO憲章前文の中の「健康」の概念に言及された。前文では、「健康」は「完全な肉体的、精神的および社会福祉の状態（a state of complete

physical, mental and social well-being)」と説明されているが、1998年に憲章全体の見直し作業が行われた時に、前記の文言に「霊的な (spiritual)」と「動的な (dynamic)」が加えられて、「完全な肉体的、精神的、霊的および社会福祉の動的状態 (a dynamic state of complete physical, mental, spiritual and social well-being) と改めることが議論された。厚生労働省、
https://www.mhlw.go.jp/www1/houdou/1103/h0319-1_6.html (2019年1月2日アクセス)を参照のこと。

引用文献

- レイチェル・カーソン, 1974, 『沈黙の春』(改版), 新潮社, 東京, 394pp.
- レイチェル・カーソン, 1996, 『センス・オブ・ワンダー』, 新潮社, 東京, 60pp.
- 原子栄一郎, 2010, 「環境教育というアイディアに基づいて環境教育の学問の場を開く」, 『環境教育』, 19(3): 88-101.
- 原子栄一郎, 2014, 「筆者の大学環境教育実践を振り返る: なぜ『フィールド環境教育学』をくだかけ生活舎で行うか?」, 『環境教育学研究』, 23: 3-18.
- 原子栄一郎, 2018a, 「環境教育を脚下照顧する: 東京大会への思い」, 『環境教育ニュースレター』, 120: 1.
- 原子栄一郎, 2018b, 「日本環境教育学会第29回年次大会 (東京) テーマ 環境教育の根本に立ち返る: いのち、環境、人間」 Concept paper, 前掲注 (6) .
- 日本環境教育フォーラム, 2016, 『環境教育図録』, 日本環境教育フォーラム, 東京.
- 日本環境教育学会, 2001, 『日本環境教育学会10周年記念誌 環境教育の座標軸を求めて』, 日本環境教育学会, 東京, 63pp.
- 日本環境教育学会, 「特集 環境教育学の構築を求めて: 学会20年の到達点と展望 (1)」, 『環境教育』, 19(1): 52-128.
- 日本環境教育学会, 「特集 環境教育学の構築を求めて: 学会20年の到達点と展望 (2)」, 『環境教育』, 19(2): 3-46.
- 日本環境教育学会, 2010, 総説と資料, 『環境教育』, 19(3): 76-142.
- 緒方正人, 2000, 「魂のゆくえ」, 栗原彬編『証言 水俣病』, 岩波書店, 東京, 182-202.
- 緒方正人, 2001, 『チツソは筆者であった』, 葦書房, 福岡, 223pp.
- 緒方正人 語り・辻信一 構成, 1997, 『常世の舟を漕ぎて: 水俣病筆者史』, 世織書房, 東京, 248pp.
- UNESCO, 2017, *Education for sustainable development goals: Learning objectives*, UNESCO, Paris, 63pp.